関東大震災の思い出

平方１５０　小島　誠

大正１２年（１９２３）９月１日、この時私は県立粕壁中学校の二年生であった。「雨天体操場」での蒸し暑い始業式を終えて、雨上がりの道を友達と粕壁停車場（現、春日部駅）へ。汽車で武里まで。帰宅後、昼食を済まして夏休みの宿題の残りを完成すべく机に向かって仕事を始めて間もなく、南の方からゴーッという不気味な音。鈍い音。それが地を這うように聞こえて来る。これが「地鳴り」であるとは後でわかった。

「アレ、何だろう。」と聞き耳を立てたとたん、ズシズシーンと激しい上下動に思わず立ち上がった。奥の部屋で遊んでいた五歳の弟が私のもとに飛んで来た。咄嗟にこれを脇腹に抱えて台所（土間）に降りた。ガチャーンとの音に振り返ると、今私の頭の上に下がっていた電灯が１米のコードとソケットだけになって揺れている。これは大変と直感したが、足元が揺れてさっぱり歩けない。丁度中学校にある遊動円木の上を渡るような感じであった。「何秒？　何分？」　夢中でわからなかったが、表に出て元の場所から十米離れた庭の中央まで出たが、何としても立っていられない。弟と共に庭に這った。生け垣の間から見える隣家（地図中４８番）のおばさんは夏のこととて、晒しの襦袢に腰巻姿で既に庭に這っていた。上下動は何時しか水平動に変わっていた。大きな茅葺きの隣家が、その揺れに合わせるようにギイギイと枘のきしる音と共に、後ろに傾いて行く。何とも恐ろしい限りで、世も之れで終わりかとさえ思った。

振動も遠のいて気が付いてみると、数米先の我が家の物置の瓦の庇（７尺、６間）が倒壊していた。母や父は隣室に居たが、どうなったか全然気が付かなかった。いざという時は、それ程夢中になって自分以外のことを考える余裕がない。後で聞いた話だが、母は初め箪笥の前に座っていたが、

「父に怒鳴られて外に飛び出した」とのことであった。母は娘の頃（実家が日本橋）、父母から「地震があったら箪笥の前にいなさい」と言われていたそうである。

その後も余震は連続してあり、屋内の物を持ち出そうと家に入っても、ミシミシと音がするとすぐに外へ飛び出す始末。それ故に１個の物を運び出すのに２・３度入らなければならなかった。その間に、近所の家が倒れたことや、私の住まいの裏に地割れの出来た事を聞いたが、見に行く勇気もなく、唯恐怖と神頼みだけが心にあった事を今尚記憶している。その日の午後、南の空に浮かんだ黒煙を見て、誰かが「火事だ、あれじゃ越ケ谷か草加だ！」と言った。日が暮れると東京の空は真紅になり、大火の様相を呈した。「昼間の煙は東京だったか、随分見当が違うものだ。」と思った。

地震による交通機関の途絶えに加え、２日からの新聞発行不能は流言を生み、軽挙な行動をなすものあり。それが更に人心を動揺せしむる結果となるものである。数日後のある夜、キイーキイーと甲高い哀調を帯びた何とも言えない奇妙な音が聞こえてきた。何だろうと集まった大人達。誰一人として調べに行く勇気はなかった。その音が時のたつに従って近寄って来た。横に倒した肥桶に天秤棒で擦っていた音で、地震よけの呪いとわかった。実は「朝鮮人がやって来る」との流言飛語に惑わされ、よそ者を村に近寄らせないために夜に行う威嚇の音であった。「じゃあ俺も」と近所でも始められた。これが次から次へと周辺の地域へ波紋を投げた事であろう。

地震の翌日から南風に乗った紙の灰が空一面に飛んで来ること数日に及んだ。この夜我が家では縁台を二つ並べて蚊帳を吊り、一晩だけ外で寝た。家によっては１週間から１０日間も寝たとのことである。

近所であったことだが、地震には竹藪が良いと教えられて居たので、そこに入ったらものすごい地割れと陥落に会い、ほうほうの体で逃げ出した

とか。又、主人公が逃げ出す様では家は潰れると頑張ったところ効なく、煤だらけの裸姿で這い出した人もいる。家が倒れて釜屋にあった昼食用のうどんが煤だらけになり、古利根川の水（当時は透明の水）で洗って食べた（平方東・金子新五郎氏の談）。当時は、毎月１日と１５日は、「物日」といって、働きに来ている作男・作女たちが午後に暇を与えられ、ゆでて作ったうどんを食べたりしたのである。又、林西寺わきの畑で豆抜きをしていて、この地震にあった森泉清左衛門（森泉春蔵氏の祖父）氏は、吃驚仰天して家に帰ろうとすると、地割れあり、噴き砂あり、あたり一面水でびしょびしょ。命懸けでこれらを飛び越え漸く道路に出ると、助けを求める悲鳴を聞く。近くの会田ゆき（林西寺の前の家）氏などと一緒に染谷家（屋号が「会の川」）に急行し、屋根を破って親子３人を救い出した。３人とも皆顔色なく、口もきけず、ブルブルと震えてばかりしていた。そして「あれを放心状態というのでしょうか」と言っていた。「何でも子供二人は庭に遊んでいたが、地震に驚いて屋内に居た親の元に飛び込んでこの始末」とのことである。

翌日、私の住まいの裏の地割れを見に行ったが、丁度我が家から８米程離れたところから２・３米の間隔を置いて３本の地割れであった。幅７・８０糎、長さ１０数米、包丁で裂いた様なこの地割れは、その両側の地表に無数のひび割れを生じ、これが崩れ落ち総出、とても飛び越す勇気は出なかった（地図中４７番）。

これ等の結果、隣家の池が隆起して道より高くなり、多くの魚が干上がってしまった（地図中４８番）。大字平方字横手部落と向こう側の大字備後（武里村）との間は１米程低い田で、村の境界には会之川と称する幅２米の堀があったが、この地震による隆起で、向こう側の畑（会之川の向こう側）と此方（会之川の手前）側の隆起した田とが一面平らになり、備後と

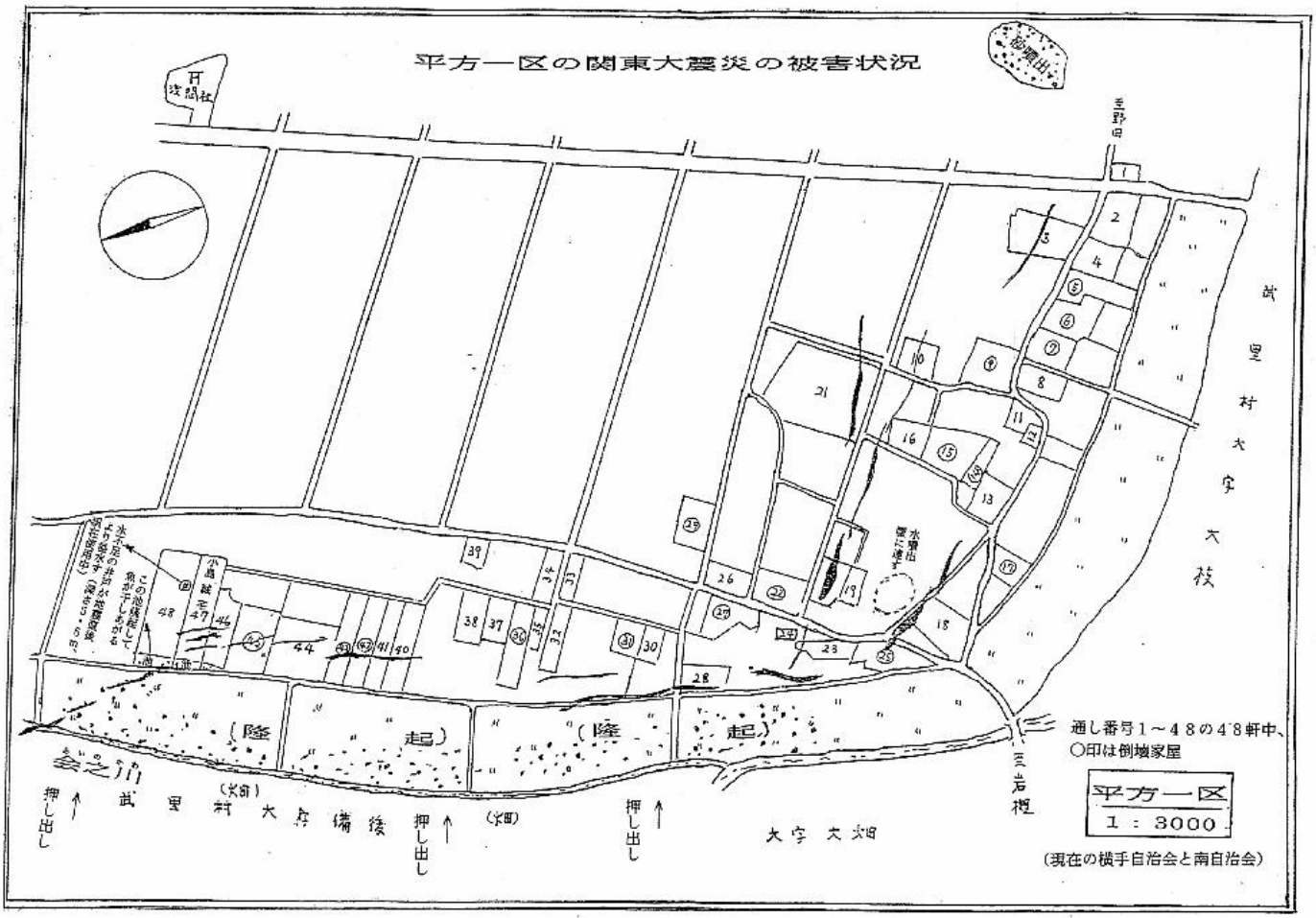
の境界が不明となって後日物議を醸した様に記憶している。

武里村備後須賀の武里小学校のそばの某家では、２米程の地割れが屋内を通った為、家が八の字形に開き、後日修理したところ、便槽が家の外になってしまった（大畑の長野重蔵氏の談）。吉川町では、地割れが出来て子供が落ちてはと、川舟を庭に上げて、そこで数日遊んだ家（上間久里の上原麟之助氏）もあったという。

県下第二の被害地となった粕壁町に用事で来ていた野口仁礼氏（越谷町本八）の話によると、「地震と同時に道路に出たが、家並みは大きく揺れ、或る家は後ろに倒れ、前にのめり、隣に寄り掛かり、その都度物凄い土煙りで全くの阿鼻叫喚の巷と化した」という。中には不幸中の幸いと申そうか、二階がお座りしたので、そこで数年営業を続けた家もあったとか。こんなことで粕壁町の倒壊家屋と武里村備後の断層は幾日かの交通止めとなった。木造家屋の柱は、方々から穴をあけるため、そこから折れる場合が多いので注意を要するであろう。粕中は、地震から約２週間程で授業を再開したが、登校して驚いたのは始業式をやった「雨天体操場」の倒壊であった。「若し３時間早かったら俺の命は否、六百余の粕中健児から多数の犠牲者を出したであろう」とその時の先生がおっしゃっていたのが印象的である。

あれから５０年、我々の記憶も薄れ、若者には「何だ地震か」と簡単に片付けられがちのように私には思える。然し、今地下には多量の地震エネルギーが蓄えられているとの学説には特に注意を要するべき時に来ているように考えられる。然るに、狭い庭に多数の石や灯籠を置き、池を造り、高いブロック塀を巡らすことをはじめ、盆栽の置き場所一つにしても地震対策の一面からも考慮する必要がある。又、夜間地震の発生を考えれば各自に懐中電灯の準備も欠くべからざるものと思う。（昭和４８年頃、記す）

元、越谷市立越ケ谷小学校長
越谷市郷土研究会長
現、越谷市郷土研究会常任顧問


平方一区の関東大震災の被害状況
砂利出
波間社
三野口
武里村大字大枝
水利出張に建て
水利出張所
水利出張所の井戸は地盤の変化のため使用できなくなった
隆起
隆起
会之門
武里村大字備後
押し出し
押し出し
押し出し
大字大畑
三岩橋
通し番号1～48の48軒中、
○印は倒壊家屋
平方一区
1：3000
(現在の横手自治会と南自治会)